読売新聞　2013年（平成25年）　6月　24日（月）

## 棚田と森の恵みとは？

# 農家が守る景色 自然

水俣市の久木野地区は棚田で有名だ。棚田は、先人が長い時間をかけ、山の斜面を削り、土を固め、石を組んで作った。美しい「段々畑」には、1粒でも多くの米を収穫したいという先祖の思いが込められている。久木野の村おこし施設「愛林館」の沢畑亨館長に「棚田の恵み」について聞いた。

謹聴熟考

支局長インタビュー

愛林館館長

**沢畑（さわはた） 亨（とおる）さん 51**

1961年、栃木県生まれ。62年から76年まで西合志町（現合志市）で育つ。東京大大学院修士課程修了（林学専攻）。修士論文は「80年代後半のむらおこし運動の考察」。百貨店勤務やコンサルタントを経て94年、愛林館館長に公募で選ばれた。著書に「森と棚田で考えた」（不知火書房）など。

――久木野の人たちが棚田を守るのはお金のためじゃないと沢畑さんの本で知りました。

「棚田で米を作っても農機具を買った費用は取り返せません。みなさん、もうからないのにやっている。先祖からの預かりものだから荒らしてはいけないという気持ちが6割。荒らすと、周囲からいろいろ言われて大変だというのが2割。残りの2割は、おいしいお米が取れるとか、米を贈ると喜ばれるといった積極的な理由だと思います」

――そのように維持されている棚田が都市の住民にも役立っているんですね。

「田から水が浸透して地下水をつくります。豪雨の時には水をためるダムになり、土壌の流出を食い止める。いろんな生き物を育てるし、棚田の景色を楽しむこともできます」

「上手にやると、1粒のモミが秋には2000倍に増える。稲穂が重くなり、頭を垂れれば、『今年も食べ物ができた』という安心感が生まれます」

――日本の食料危機を心配されていますね。

「世界の人口は増えているのに、これまで穀物を食べていた人たちが、穀物を餌にして家畜を食べるようになっています。世界的に食料はいずれ足りなくなるでしょう。日本は今、食料を輸入できるから十分な量がありますが、国全体が膨大な借金を抱えています。経済的な危機が起き、輸入が止まれば、かなり厳しいことになる」

――食料危機が起きても久木野は大丈夫では。

「少なくとも食べる物はあります」

――棚田の保全が森を守ることにもなるんですね。

「棚田があるから山村に人が住み、森の手入れをする。よく手入れされた森は、落ち葉で土をつくり、酸素をつくります」

「森は海に、川を通じて栄養分を提供します。ただ、砂防ダムなどが途中にあると、水の中で、酸素のない状態で落ち葉が腐り、有害な硫化水素が発生する。いらないダムを壊すような公共事業をぜひ、どんどんやってほしい」

――棚田と森を守るのに必要なことは何ですか。

「棚田と森の恵みにお金を払ってくれませんかと訴えています。具体的には、農家への直接補償を充実してほしい。環太平洋経済連携協定（TPP）が実現すれば、農産物は暴落するでしょう。それで食っていけなくなる農家は直接補償で支える。EUなどではそうしています」

――久木野に住んで来年で20年ですね。

「こっちに来て知ったことは、枝豆とかトウモロコシとか空豆とか鮮度が大事な野菜が本当においしい。キャベツも白菜も小松菜もみずみずしい。一日中草刈りをして汗を流して、家に帰ったら、頂き物の空豆をゆでてビールを飲む。それはそれは幸せです」

### 後記

沢畑さんは、「久木野に農業はほとんどない」と言った。「業」として成立するもうかる「農業」は久木野にほとんどなく、その代わり、経済合理性とは無関係の「農」の営みは豊かにあるという意味だった。

私を含め都市部に暮らす人間はふだん、「農業」にも「農」にも直接には関わらず、食べ物そのほかの恵みだけを頂戴している。沢畑さんが提案する直接支払い制度の充実を含めて、「農」を守るための行政の支出はもっと増やしていいのではないか。　岩永芳人